

## ▶【Zoom セミナー】

「食品包装商品設計(開発)勉強会(全 14 回)」

開催日：2022年5月18日～2023年6月21日(月1回 全14回)

主催：株式会社テックデザイン

講師：HIRO・包装設計研究所 所長 佐々木 敬卓 氏



新商品を開発する際、包装材のことはいつ考えますか？

おそらく、形が出来上がってから、価格とデザインを中心に考えることが多いのでは。

外観にもこだわりたいですが、大切な商品を守るという役割を考えると、包装材もとても重要です。

密封性やガスバリア性、耐熱・耐冷温度など、考えることはたくさんあります。内容物(商品)との相性によっては、包装材と化学反応を起こし、賞味期限を縮めることにもなりかねません。そういった意味では、バラ売りの果物についているシール、それも『包装』と言えるのです。



包装商品を開発する過程は、企画→原料→製造加工→充填包装→物流→店頭・売り場→調理→廃棄・リサイクルの 8 段階に大きく分けられます。包装材についても、商品と同じように、企画の段階から考え、各段階でのあらゆる場面を想定しておく必要があります。



消費者は主観的に商品を見て、直感で判断して購入します。そのイメージが内容物と違っているのは、商品に表示したことと内容が異なっているということ。いわば、消費者との『約束』が守られていない状態であり、商品価値が『劣化』しているのです。そのため、製造者側は、品質の保持について、科学的に考え、劣化を抑制しなければなりません。

劣化とは、商品の設定規格からずれることすべてを指します。しかし、劣化と聞くと、どうしても味や見た目ばかり考えがちです。食品中の水分蒸発による乾燥や、油脂の酸化がまさにそうですね。

では、もしバレンタインチョコレートが真っ二つに割れていたら、皆さんどう思いますか？  
がっかりですね。こういった、輸送中の衝撃による形の崩れもすべて『劣化』です。そうしたあらゆる劣化要因を想定して、包材の材質や厚さ、ガス封入など、包装を設計する必要があるのです。



異物混入という問題も、包装商品とは切っても切れない関係にあります。異物の多くは包装商品となつてから発見され、その内容も虫やプラスチック破片、植物片など様々ですが、その商品自体も『異物』となる可能性があることをご存じですか？意外に思われるかもしれませんが、『異物』とは、『その包装内に入っていることが想定されないもの』すべてを指しますので、包装過程で破損した商品自体や、包装材の一部が混入すれば、それは『異物』となります。包装室の衛生環境を整えているからといって、油断はできないのです。



近年は環境問題の観点から、包装の簡略化や脱プラスチックが叫ばれますが、簡略化しすぎて、『商品の保護』という第一目的を果たせなくなるとは本末転倒です。何かと悪者にされるプラスチック製品ですが、現代社会では不可欠のもの。悪いのはプラスチックではなく、海洋放出の原因となるポイ捨てなのです。

商品を販売する上で不可欠な、『包装』について、改めて注目してみませんか？